

山田篤裕 教授

専門:社会政策論

(インタビュアー:倉富・菊井)

『社会政策への経済学からのアプローチ』

Q. 山田ゼミの研究内容はなんですか？

社会政策は、労働政策という分野と社会保障・福祉政策という分野に大きく二つに分かれます。よく経済政策と対比されて社会政策とはなんだと聞かれるんですけども、一番簡単に言えば、「社会問題を、労働政策と社会保障政策という大きな二本柱の政策で取り除く・軽減する」というのがその中身ですね。

では社会政策「論」はどのような研究分野なのかという話になりますが、経済学からのアプローチでは、効率性と公平性を高めるにはどのような社会政策であるべきか、ということを追究していくことが理論面からの研究課題ということになります。また、社会保障政策は、経済規模の二割以上の大きな給付、所得再分配を行っています。給付を行う、ということは人々の所得分配に影響を与える、ということですから、社会政策によって、所得分配状況がどのように変化しているのか、改善されているのか、それを確認することも、実証面で大きな研究課題のひとつです。

本学でも、いろいろな家庭の事情を抱え、実際に社会問題に直面しているという人たちも少なくないですから、社会問題をどのように取り除くのか、というこの研究分野は取り組みやすいと思います。また、高齢化が進むにつれ、現役世代のことも考えて、社会保障給付をどうやって効率的に分配するか、所得分配状況を改善するのに、どう使っていけばいいのか、という問題は、みなさんにとっても非常に身近な問題だと思います。

Q. 山田先生の専門とされている研究内容はなんですか？

私自身の研究としては、大きく三つくらいあります。

一つは、最低賃金、年金、生活保護、という人々の暮らしを支える、生活のミニマムを形成する社会政策があるんですけども、そのバランスが諸外国にくらべて

日本はかなり歪（いびつ）になるので、そもそも社会保障給付の基礎水準となる最低生活費をどういう風に決めていけば良いのか、またそれを必要としている人々、つまり貧困層はどれだけいるのか、という研究をやっています。

二つめは、社会保障給付が経済規模の二割を占める、というのは大きく見えるかもしれませんが、日本ほど高齢化が進んでいない諸外国と比較してもこの規模は非常に小さいんですね。そうした中で、日本の社会保障給付の5割が年金給付ですが、それが高齢者にとってエフェクティブか、ということですね。とくに日本の場合、高齢者の就業率がとても高いので、就労所得との関係も勘案しつつ、高齢者の所得分配を評価しないといけない、という状況です。高齢者における所得分配状況の把握というのが二つめの研究課題となっています。

三つめの研究課題として、人々にとって一つの大きな社会問題というのは、健康が損なわれた場合ということなので、低所得層においてどういう医療・介護アクセスが行われているか、ということの研究しているところです。

『新しい知見を得るお手伝いをしたい』

Q. 山田先生の教育理念を教えてください

教育理念というのは、ゼミもまだ七期なのでおこがましいですが…。教育といっても、学生が興味を持ったことを掘り下げるお手伝いをする、というだけのことなのですが、少なくともそうしたサポートをするなかで、学んで欲しいと思っている、ということでお話ししたいと思います。

一つは社会問題を対象とする学問であるので、何が社会問題なのか発見する。しかも発見しただけではだめで、解決策まで筋道だって考えるという知的作業があるわけですね。そうした、問題発見をして、解決策を提示して、それを他人に分かりやすく伝える、というスキルを習得してほしいな、と思っています。

二番目はチームワークで、「半学半教」という慶應義塾の理念があると思うんですけども、お互いに切磋琢磨して、論文を書いたり、建設的にコメントしあったりして、それをもとにどんどんよい方向に研究を進めていく、ということを知って欲しいなと思います。

三番目は、新しい知見を得るお手伝いをしたいということですが、研究というのは、時間を節約して行うことはできないんですね。みなさんなるべく時間をかけず、なるだけ最大の成果を得ようとする姿勢が今まで身に付いていると思うんです。それはいいことなんですけれども、研究というのはやや違うやり方で進めないといけない。地道な作業をつみかさねるなかで、ポツと新しい知見に結びつくような、機

会が得られるわけなんですね。その向こうに、ああ、こういうことだったのか、という新しい知見を得る喜びっていうのがあるので、それを得る喜びっていうものを目指して欲しいな、それを手伝いたい、という風に考えています。

それから、結局、卒業論文を書くというのは、ゼミに入って卒業までの二年間の長期プロジェクトになるので、その長期プロジェクトを自分でマネジメントするという、知的作業において長期的な計画を立てる練習をやってほしいな、と思っています。

教育理念といえるか分からないんですけども、学んで欲しいことですね。

『将来この社会がどうなっていくのを見たいという強い欲求』

Q. 山田先生の学生時代のお話を聞かせてください

一、二年生の間は、テニスサークルと美術団体の二つサークルに入っていました。ふつうに大学生生活を満喫していたと思います。

ただ二年生の終わりころになって、将来この社会がどうなっていくのか、それを見てみたいという欲求、知的好奇心みたいなのが出てきました。それで、社会政策は社会のあり方を決める重要な政策ではないか、と思って、社会政策という分野に惹かれ、またちょうどその社会政策のゼミを主催していらした先生が、研究者も育てたい、という方だったので、三年からゼミ中心にやっていくことにしました。

自分もそうだったので、学生の研究テーマが二転・三転するのはシンパシーを覚えます。でも、そういう回り道とかいうのも重要な、と思いますね。

『分野に関心があり、地道なことを厭わないこと。』

Q 山田ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

これは、一にも二にも三にも、社会政策の分野に関心があることが重要です。それに尽きると思います。そして私のゼミでも、最終的に何か新しい知見を得るっていうことを目標にしているので、そのための地道な作業を厭わないこと。データの分析手法や、社会政策のさまざまな制度、あとは分析の基本となる経済学のフレームワークについても、経済学のアプローチで社会政策を研究するので、きちんと学んでください、と言っています。そういう地道なことができる人を求めたいです。

研究は、どうしても地道な作業の連続だから、途中でいやになる時もあるんですね。そういう時に原点として戻れるところ、例えば社会問題への強い関心とか、何か社会問題の存在自体に憤りを覚える、とか。そういうのが研究のモチベーションとしては重要でしょうね。何となく社会問題、社会政策に興味があるってだけでも

大歓迎なんですけれど、それがあるとななお大歓迎ですね。

『差がつく二年間。知的な鍛錬をすることが大切』

☆最後に2年生へのメッセージをお願いします☆

やはり、二年生のうちには、幅広い一般的な教養を学び、専門的な教養を深めるとともに、語学も一生懸命やっておいた方がいいです。日本国内の社会政策の制度的バリエーションなんて小さいわけで、諸外国の社会政策についても知る必要も出てきますから。

もちろん、みなさんの20歳前後の大学時代の交友関係っていうのは一生続きますから、ゼミでもサークルでも、そうした関係を深めてほしい、と思います。

でも一方で、大学生活で学問的に何をやるかということ、これまでの蓄積を駆使して、自分で何らかの新しい知見を得るということで、卒論で学問的な区切りをつけるということですから、三年生からはキャンパスも変わることで、心機一転、頭を切り替え、学問をしてほしいなあ、と思います。

ゼミも色々と、先生の方針によって、割合と放任なところとか、まあいろいろあるとは思いますが、どういふ方針にしろ本人が頑張るか頑張らないかで、知的な鍛錬をした人と知的な鍛錬を全くせずに卒業した人で、この二年間でものすごく大きな差がつくということですね。怠けた分は、自分では影響がないように思っても、実は大きな「機会費用」が発生している、ということを考えて欲しいなあ、と思います。

【編集後記】

今回のインタビューにおいて、山田先生は入ゼミ時に配布した説明資料を持って来てくださり、社会政策とはそもそも何か、といったことから分かりやすく説明をしてくださいました。

山田先生は知的な雰囲気のある素敵な方で、終始穏やかな語り口のなかに、学生に対する誠実さを感じた。二年生にゼミとは何かということ伝えることを目的として始まった本企画であったが、インタビューである私たちゼミナール委員にとっても大変勉強になる時間だった。今回はお忙しいなかインタビューにご協力いただき、ありがとうございました。

財務 倉富悠